のブリッジ余談（第 75 回）

エース・フロム・エースキング

2015.9.18

A子さん「スートコントラクトでサイドに AKx を持っているとき、A をオープニングリードする人を最近はよく見かけるようになりましたが、従来の K をリードするのとどう違うのですか？」
B先生「そうですね、従来は K が主流でしたが、最近では A からリードする人の方が多くなっているようですね。」
A子さん「何がいいのでしょうか？」
B先生「AKx から K をリードするというのは伝統的な方法だったのですが、2 つ欠点がありました。パートナーにとって AKx からリードされたのか KQx からリードされたのかどちらか判りませんよね。パートナーは、例えば Jxx と持っていたときにカモンシグナルをするのか、ノンカモンか迷います。前者のときカモンをすると次いで A が出されてディクレアラーの Q を生かしてしまいますし、後者のときにノンカモンをすると続けてはくれませんよね。これでは困ります。これが欠点の一つです。もう一つは、スモールカードのダブルトンを持っているときです。カモンをすると前者の場合はラフできてよさそうですが、後者のときは、ディクレアラーに AJx と持たれていてダックされると、続けられては損をしますよね。これらを解消するために工夫されたのです」
A 子さん「なるほど、前者は A のリードで AKx、後者は K のリードで KQx とはっきりと区別されるのですね。でもどんな時もこうするのですか？」
B先生「AK を持っていて K をリードする場合もあるのですよ。まずそれは AK ダブルトンのときです」
A 子さん「ほかにもありますか？」
B先生「6 レベルか 5 レベルのコントラクトのときがあります。このようなコントラクトでは、まず A をとってダミーを見て次のリードを決めるということはよくありますよね。したがって A のリードは K を保証しないので、やはり AKx からは K のリードということになります。スラムに近いコントラクトですからディクレアラーに A をダックされる可能性は低くなり、それほど困ることは起きないのです」
A 子さん「まだありますか？」
B先生「パートナースートの場合も A のリードは K を保証はしませんし、自分がビッドしてサポートされたスートの場合もそうです。そのほかディクレアラーがプリエンプトオープンしてそのスートのコントラクトになった場合ダミーを見るためにサイドの A を取ってみることはよくありますが、そのときは K を保証していません。だからこのようなシチュエーションのときも AKx からは K をリードします」
A 子さん「案外と複雑なのですね。この方法を使ったとき派生してくることはありますか？」

B先生「AKQx を持っているときどうするかという問題もあります。伝統的な方法ではまず K をリードし次は Q でした。この段階ではまだ A があるのかどうか判りませんよね。エースフロムエースキングを採用したときは A ついで K ということになりますが、ここでもまだ Q があるかどうか判りません。そこで工夫されているのが Q からリードするのです。これはいわゆる「0 or 2 higher」と言われるオープニングリードの方法*とも整合しています」
A 子さん「なるほど、Q がリードされてこれが取れてしまったら、ほとんど AKQ からと判りますね、そのときパートナーはどうフォローすればよいのですか？」
B先生「普通カウントシグナルを出します」
A 子さん「エース・フロム・エースキングでかえって困ることは起きないのですか？
B先生「先に説明した K をリードする場合を守ればありません。しかし多くの人が AK ダブルトンの場合を除いては使っていないように見えます。エース・フロム・エースキングを使うときは同時にそのほかのこともお勧めします」
A子さん「よく判りました。こんどから使ってみようかな。でもＮＴコントラクトのときはどうするのですか？」
B先生「日本ではＮＴの場合は従来通りという人が多いですね。A のリードはアンブロック要求でハイカードを捨てて欲しいという従来通りのものになります。なおついでですがトランプコントラクトで A のリードの時はアティチュードシグナルをし、K のリードの時はカウントシグナルをするという人も居ます」

* 10 か 9 のリードがされたとき、それより上がないか、上に 2 枚あるかのどちらかだと言うリードのコンベンションです。J からのリードはそれより大きいものを否定します。例えば KJ10x からは 10 をリードしますし、1098x でも 10 をリードします。A、K、Q のリードは従来通りとなります。